

英語に入ったラテン語の複合動詞 一音の変化概略と主要動詞一覧

Latin compound verbs in English

— A List of main verbs and an outline of phonological changes —

兵頭俊樹

Toshiki HYODO

(和歌山大学教育学部ドイツ語教室)

2013年10月4日受理

初めに

accept と receive は類義語として辞書でも枠で囲って意味の違いの説明がされたりする。綴りからは想像したいが、この二つの動詞の基礎になっているのは同じ動詞である。いくつかの英和辞典の語源欄を比べてみよう。(以下『リ』 = 『リーダーズ英和辞典』第3版、研究社2012、『ジ』 = 『ジーニアス英和大辞典』大修館2001、『新』 = 『新英和大辞典』第6版、研究社2002)

accept

『リ』 OF or L ac- (cept- cipio = capio to take)¹
『ジ』 初 14c; ラテン語 acceptāre より。「ac- (…に) + -cept (取る) = (同意し自分) に受け入れる」。cf. *concept, deceit, except, perception, reception*
『新』 (c1380) □ (O)F accepter // L acceptāre (freq.) ← accipere to take ← ac 'ad.' + capere to take

receive

『リ』 OF < L re- (cept- cipio = capio to take) = to get back again
『ジ』 初 14c; ラテン語 recipere (取り戻す)。re- (後ろに) + ceive (受け取る)。cf. *conceive, deceive, perceive*
『新』 (?a1300) receive(n) □ ONF recevoir (変形) ← OF recevoir (F recevoir) < L recipere to take back ← re- + capere to take (IE *kap- to grasp)

この二つの動詞はいずれも接頭辞がついたもので、その基礎になる動詞は『ジ』では明確ではないが、『リ』は capio、『新』は capere で、意味は to take 「とる」で同じである。capio は現在 1 人称単数形、capere は不定詞で、記載の仕方が異なるだけである。

ラテン語では、おもに前置詞として存在する語が動詞

の前に付加されて接頭辞として用いられることが非常に多い。そのさい基礎になる動詞を基礎動詞と呼び、こうしてできた複合語をここでは複合動詞と呼ぶ。他の品詞が接頭辞となるものについては本稿では扱わない。また独立した単語としては用いられない re-などを接頭辞とするものは派生動詞と呼ぶべきかもしれないが、まとめて複合動詞とする。

英語の accept も receive もこのようなラテン語の複合動詞に遡り、こうした語はかなりの数に上る。だが長い歴史のなかでの様々な変化のためにその理解は容易ではなく、辞書によりその語源の記載の仕方にも違いがみられる。本稿ではこのような複合動詞をできるだけその源まで遡って整理しながら理解しようとする試みである。

I 動詞の3基本形

母音は基本的に a, i, u, e, o の5母音で、それぞれに短母音と長母音がある。一般のテキストではその長短を表記しないが、ラテン語辞書の見出し語や英語辞典の語源欄などでは、長母音であることを示すために母音の上に横線を記すことが多い。二重母音は ae, au などである²。子音はいわゆるローマ字読みと大体同じであるが、目立つ違いとしては、c は発音記号で [k] であり、j は [j], v は [w] などである。

「英語は基本的に西ゲルマン語の1つ、アングロサクソン語であるが、中世の政治的・文化的変動の結果として、おびただしい数のラテン語系の語が入っている。その中で最も面白いのは動詞であろう。ラテン語の動詞には、現在幹、完了幹、目的分詞幹の3種類の語幹がある。その中で英語の動詞の基になっているのは、現在幹か目的分詞幹のどちらかである」³。現在幹、完了幹、目的分詞幹というのは、さしあたり英語でいえば現在、過去、

過去分詞という基本形に相当するものとイメージしておこう—術語の違いと意味については後で述べる。

動詞を規則動詞と不規則動詞に分類すると、ラテン語の動詞は——複合動詞など含めなければ——10ばかりの不規則動詞を除いて、残りはすべて規則動詞とされる。そして規則動詞はさらに4つのパターンに分けられる(第1-4変化)⁴。辞書では動詞の直説法能動態現在1人称単数形(以下、現1単と略)を見出し語とし、続いて現在不定詞(不定詞と略)、直説法能動態完了1人称単数形(完1単と略)、目的分詞を挙げる。規則動詞の場合これらを知れば、規則に従って語尾などをつけることで必要なあらゆる形を導くことができる。不定詞から直接に過去・過去分詞を得られる英語の規則動詞とは意味合いが異なる。

以下できるだけ簡潔な記述を目的として、本稿の本文中で用いる基礎動詞は以下の12個に限定する。標準的な変化として、第1変化から *amāre*「愛する」、第2変化から *monēre*「忠告する」、第4変化から *audīre*「聞く」。これらに遡る外来語として、アモーレ、モニター、オーディオがある。以下、基礎動詞として使用頻度の高いもので、第2変化 *tenēre*「保つ」はコンテナに、第4変化 *venīre*「来る」はコンビニに入るが、先の標準的な変化とは若干の違いがある。複合動詞を作るのは第3変化が圧倒的に多く、基本的な動作を意味する動詞が多い。*dūcere*「導く」は外来語としてコンダクターに、*capere*「捕まえる」はキャプチャーに、*cēdere*「歩く」はプロセスに、*dīcere*「言う」はディクテーションに入る。第3変化からはさらに、母音で始まる *agere*「駆り立てる」、二重母音 *ae* を含む *caedere*「倒す」、同じく *au* を含む *claudere*「閉じる」をとる。これらからアクション、コンサイス、コンクラーベなどが外来語として日本語にまで入る。以上の12の動詞を大体含めて使用頻度の高い基礎動詞20を選び、これに接頭辞のついた複合動詞を本稿の末尾に表として付す。

	現1単	不定詞	完1単	目的分詞
#1 第1変化	<i>amō</i>	<i>amāre</i>	<i>amāvī</i>	<i>amātum</i>
#2 第2変化	<i>moneō</i>	<i>monēre</i>	<i>monuī</i>	<i>monitum</i>
#3 第3変化	<i>dūcō</i>	<i>dūcere</i>	<i>dūxī</i>	<i>ductum</i>
#4 第3b変化	<i>capiō</i>	<i>capere</i>	<i>cēpī</i>	<i>captum</i>
#5 第4変化	<i>audiō</i>	<i>audīre</i>	<i>audīvī</i>	<i>audītum</i>

現1単と不定詞の関係について。不定詞から *-re* を除いた現在幹はそれぞれ *amā-*, *monē-*, *dūce-*, *audī-*。現1単の語尾は *-ō* は現在幹に付けるが、その際に第1変化

amā+ō では *ā* が呑み込まれて *amō*、第3変化も *dūce+ō* では *e* が呑み込まれて *dūcō*、第2変化 *monē+ō* では *ē* が短くなって *moneō*、第4変化も *audī+ō* で *ī* が短くなって *audiō*、第3b変化は第4変化に近く *faciō* となると考えれば理解しやすい。

不定詞と完1単と目的分詞を各変化で比べてみる。第1変化をいわば典型的な規則動詞とするなら、第4変化はほぼこれに準じる。第2変化の完1単と目的分詞の語尾が *-ēvī*, *-ētum* ならば同様であるが、実際にはこの型は稀なので *moneō* の変化 *-uī*, *-itum* が標準とされる。これに対して第3、3b変化はむしろ不規則に見える。第1-4変化という分類はもっぱら現在幹にのみ関わるものであり、特に、基本的な動作を意味する動詞が多い第3変化では、完了幹はこれとは直接関係せず別原理で作られ、目的分詞幹は基本的にさらに根源的な印欧祖語の時代の語根の弱階梯に関わっている。

いま第3変化 *dīcere*「言う」を例にとって各語幹を整理すれば、

- #6 現在幹 *dīce + re* = 不定詞
- #7 完了幹 *dīx + ī* = 完1単
- #8 目的分詞幹 *dīc + tum* = 目的分詞

ラテン語の複合動詞が英語に入る過程を扱う場合、完了形はほとんどこれに関せず、また現在形も、英語の辞書がラテン語動詞を不定詞ではなく現1単で挙げている場合を除いて必要はないと思われる。末尾の複合動詞の表には基本形としてこれらの形を記すが、本稿ではこれ以降、不定詞と目的分詞のみを扱う。

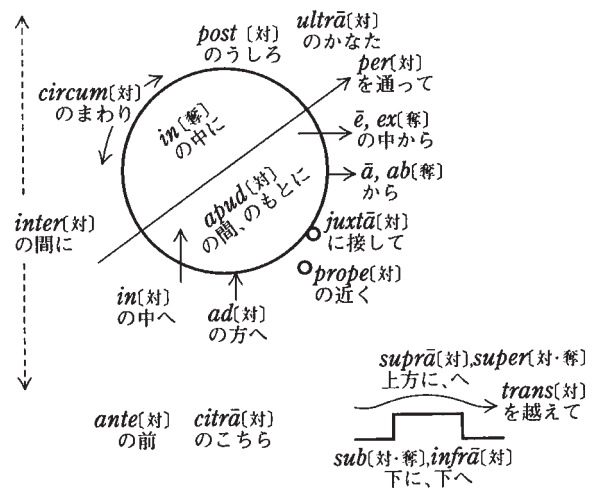
目的分詞幹 *+ t + us, a, um* などの形容詞の語尾変化をつければ完了受動分詞となる。これは完了分詞とも、時に細かい違いを無視して過去分詞とも呼ばれる。語形にだけ関していえば、目的分詞は完了受動分詞の中性単数主格および対格と一致する。用法としては、目的分詞は移動などを表す動詞とともに用いられてその目的を表す。ただしその使用は一般的ではなく、よく出くわすというものではない。それに対して、完了受動分詞の使用は幅広いので、これを基本形のひとつとすればよさそうであるが、語尾変化の表記が煩わしくなり、また自動詞の大半はその意味上完了受動分詞を持たないので都合が悪い。目的分詞はまたスピーヌム (*supinum*) と呼ばれることもあるが、いずれにしろ耳慣れない感は否めない。しかし、これが英語の過去分詞に匹敵する完了受動分詞と、さらには抽象名詞や行為者名詞など数種類の名詞と共通する語幹であり、二次派生の動詞のもとに

なる形であることを考えれば、不定詞に劣らぬ重要な形であることが理解される。たとえば *-tum* に替えて *-tus*, *-tio*, *-tator* を加えれば派生名詞 *dictus* (*the saying*), *dictiō* (*speaking, utterance*)、*dictator* (*dictator*) などができる。また *-tāre* をつけて反復動詞 (*frequentative*) または強調動詞 (*intensive*) と呼ばれる二次派生の動詞の不定詞 *dictāre* (*to say habitually or repeatedly; to indicate, to dictate*) となる。こうして派生した動詞は第1変化の動詞で、語源欄にもよく見られ⁵、英語に *dictate* として入ったのは、この派生動詞の完了受動分詞からで、先に挙げた *dictator* もこの派生動詞を経由して生まれた名詞であり、これは英語の *dictator* となる。もっとも英語に入ったのは *dictator* が先で14世紀末、*dictate* は16世紀末である。なお、目的分詞は *-tum* で終わると述べたが、動詞の語幹が歯音 (*t, d*) を含む場合には *-sum* ないし *-ssum* となる。たとえば不定詞 *caedere* の目的分詞は *caesum*, *cēdere* は *cessum* である。ともあれ、複合動詞の多くを作る第3変化動詞では、総じて現在形ないし不定詞よりも、目的分詞に現れる形態の方が印欧祖語の語根の弱階梯に近いことは留意さるべきであろう。

II 接頭辞 (前置詞)

複合動詞の接頭辞として用いられるものの多くは前置詞としても存在する。元来空間的な位置を示す副詞であったと考えられるが、動詞の動作の対象となるものの場所を示す働きが、動詞との結びつきを強くして接頭辞となり、また主に名詞との結びつきを強めて前置詞になったと考えられる。特に動詞の接頭辞として使用頻度の高いと思われるものを10選ぶとすれば、*ab, ad, cum, de, ex, in, ob, per, prae, prō, re-, sub*。これにさらに少し使用頻度の低いものを加えるとすれば、*ante, circum, inter, post, super, trans, dis-* あたりになるが、これらは2音節になるものを含み、意味が比較的狭く限定されているものが多く、形態上も見分けやすい。

いま挙げた接頭辞とすべて一致するものではないが、前置詞が場所・空間を指示するイメージ図を他所より以下に借用する。前置詞・接頭辞には空間指示の意味に加えて、時間指示の意味をもつものもあり、さらには様々な抽象的な意味をもつようになったものも多い。また特に接頭辞として、単なる強調・強意のニュアンスのみの場合も少なくない。



接頭辞として用いられる場合の主な意味は以下のとおり。

ただし接頭辞の綴りは基礎動詞の語頭の音との関係でこれとは異なったものとなることがある——たとえば *ab-, ā-, abs-, au-* など。

- #9 *ab-, ā-*: から、離れて、*away, from*
- #10 *ad-*: へ、向かって、*to, towards, in addition*
- #11 *com-*: と、一緒に、*with, together*; (強調)、*completely, very*
- #12 *dē-*: から、下へ、離れて、*down, away, aside, out off*; (強調)、*utterly, completely*
- #13 *ex-, ē-*: から、外へ *from out, forth*; (強調)、*exceedingly, up*
- #14 *in-*: 中、*in, into, on, upon, against*
- #15 *ob-*: 向かって、前 *towards, to, opposite, against, over*
- #16 *per-*: 通って、*through*, (強調)、*thoroughly, very, completely*
- #17 *prae-*: 前、*before, in front, forth*; (強調)、*very*
- #18 *prō-*: 前、*before, in front, forth, out, away, instead of, for*
- #19 *re-*: 後、*back, again*
- #20 *sub-*: 下、*under, up (from beneath)*; *rather, somewhat, a little, secretly*⁷

III 子音の同化と母音の融合、母音の弱化

1 子音の同化と母音の融合

接頭辞が基礎動詞に付くときに、接頭辞の語末音と基礎動詞の語頭音の関係は次のいずれかである。1) 語末音が母音 + 語頭音が母音 2) 語末音が母音 + 語頭音が子音 3) 語末音が子音 + 語頭音が母音 4) 語末音が

子音 + 語頭音が子音。それぞれ母音と子音が接する 2) と 3) の場合は特に問題はない。子音どうしがぶつかる 4) の場合はいろいろな変化がみられるが、特に注目されるのは接頭辞末の子音が基礎動詞の語頭の子音に引張られて音が同じに (または近く) なる子音の同化という現象である。また母音どうしが接する 1) の場合には母音の融合という現象が起きたり、母音の衝突を避けるために子音が挿入されたりする。

#21 子音の同化の例

ad + cēdere → accēdere 近づく、*to go to, approach*

sub + cēdere → succēdere 下に行く、成功する、*to go under, go up, approach, prosper (succeed)*

com + tenēre → continēre 結合する、含む

#22 母音の融合の例

dē + agere → dēgere 過ごす、暮らす、*to spend one's life, live*

cum (co) + agere → cōgere 駆り立てる、強いる、*to collect, compel*

2 母音の弱化

ラテン語は古典期よりも前には、単語のアクセントが語頭にあったとされる。古典期と違って、複合動詞のアクセントは接頭辞に置かれていたことになり、その結果として基礎動詞の短母音と二重母音はアクセントを失い相対的に弱くなった。a と e は開音節 (母音で終わる音節) においては共に i という口の開きの狭い音にかわるが、a は閉音節 (子音で終わる音節) では e への変化にとどまる。また二重母音は長母音化する。

#23 a → i (開音節で) capere : ac-cipere 受け取る

#24 a → e (閉音節で) captum : ac-ceptum (accipere の目的分詞)

#25 e → i (開音節で) tenēre : con-tinēre 結合する

#26 ae → ī caedere : con-cīdere 切り倒す

#27 au → ū claudere : in-clūdere 閉じ込める

IV 印欧祖語—ラテン語—フランス語—英語に至る母音の主な変化⁸

ラテン語の複合動詞が英語に入っていく過程とその語源欄における記述をある程度理解するために、特にアクセントのある母音の変化の概略を知ることが重要であると思われる。アクセントがない母音は弱化や消滅が起こりそうだと想像できるし、子音は発音位置が同じか近

い他の子音への変化などが考えられる。これに比べるとアクセントのある母音の変化は、短母音化や長母音化、単純母音化や二重母音化、発音位置のシフト、綴り字と発音のずれなど非常に複雑に見える。以下はそうした主にアクセントのある母音の限られた音環境での変化の概略である。ただし、文字のない時期、正書法のない時期、推測される音の違い、綴りと発音の対応やずれなどの様々な理由から、文字、音素、発音記号などを厳密に区別しえないままで、印欧語史、ラテン語史、フランス語史、英語史などの概説書からのつぎはぎにとどまる。

1 印欧祖語からラテン語へ

印欧祖語の母音は a, i, u, e, o のそれぞれの短母音・長母音、二重母音は ai, ei, oi; au, eu, ou。ラテン語に至る過程で、語頭においては、単母音は変わらず、au も変わらず、ai は綴りが ae に代わるものの発音は古典期も変わらない。これに対し ei は長母音の ī に変わり、残る oi, eu, ou はいずれも ū となった。(#28, #29)

2 俗ラテン語 (紀元 100 ~ 500)

俗ラテン語では、古典期の母音の長短の区別がなくなり、音量に代わって音色が母音を区別する特徴となる。アクセントのある開音節の母音の場合⁹、古典期の長母音は口の開きが狭い母音となり、短母音は a を除いて口の開きが広い母音となって体系が変化した。(#30)

3 フランス語の形成期 (500 ~ 850)

5 世紀に開音節の母音はふたたび長母音化していたが、ゲルマン語の強いアクセントの影響を受けて北部のオイル語ではこれが二重母音化する。ただしもっとも閉じた母音 i と u を除く。

4 古フランス語 (850 ~ 1300)

発音とつづり字はおおむね一致していた。12 世紀の古フランス語の「古典期」には多くの二重母音に加え三重母音も存在した。13 世紀にはしかし同化 (ou > u; ue > œ など) や半子音への移行 (ie > je; yi > qi など) によって単純母音に移行する傾向を見せ始める。

5 中期フランス語 (1300 ~ 1600)

14 世紀初頭における二重母音 ei, ue もこの時期に単純母音化がほぼ完了するが、au はなおただ一つの二重母音として残る。発音と綴字のあいだにずれが生じる。法律家の書記や人文主義者たちにより、もとのラテン語にあった子音字が発音とは関係なく綴字に入れられた。

6 近代フランス語 (1600 ~)

17 世紀には大体今日のフランス語と同じ音素体系になる。oi は [we] から [wa] に。

7 中期英語 (1100 ~ 1500)

二重母音は古英語からの継承ではなく、全て新しい発達で、古英語の母音 + 子音が二重母音に。[u:] の音を ou, ow の綴りで。フランス語借用語で [ɔi]。[a][e][o] が2音節語の開音節で長母音化。写字生が w,m,n,u に隣接する [u] 音を識別しやすいように o の綴りで。

8 近代英語 (1500 ~)

ルネサンス期に、ラテン語由来の英語の綴りを古典ラテン語の綴りに基づいて改革しようとするものがあつた。たとえば現代英語の *adventure* は、古フランス語ですでに接頭辞 *ad* の *d* がなくなって *aventure* となり、1200 年頃には中期英語にこの綴りのまま入っていたが、近代英語でラテン語の綴りに倣った *d* が綴りでも発音で

も復活し現代に至る。

9 大母音推移 (15 世紀末 ~ 近代)

中期英語の終わるところから初期近代英語にかけて強勢のある長母音に起こった大がかりな変化。長母音の舌の位置がシフトし、[i:] と [u:] はそれぞれ二重母音化して [ai] [au] となった。詳しくは以下の表参照。

印欧祖語からラテン語に至る二重母音の変化、ラテン語からフランス語に至る強勢開音節の母音、フランス語から英語に入って後の大母音推移と呼ばれる綴り字でははっきりしない長母音の音の変化 — これらを英語に入ったラテン語の複合動詞という視点を中心にして概観すれば以下のようになるかと思われる。

	印欧祖語	ei		ai		oi	eu	ou	au					
#28	〈二重母音のみ〉	↓		↓		↓	↓	↓	↓					
	古ラテン語	ei		ai		oi	ou	ou	au					
#29	〈語頭二重母音のみ〉	↓		↓		↘	↓	↙	↓					
	古典ラテン語 (前1c.)	ī	i	ē	oe	e	ae	ā	a	o	ō	u	ū	au
#30	〈強勢開音節〉	↓	↘	↓	↙	↘	↙	↓	↘	↙	↓	↓	↓	↓
	俗ラテン語 (4c.)	i		e		ε		a	ɔ		o		u[y]	au
#31	〈強勢開音節〉	↓		↓		↓		↓	↓		↓		↓	↓
				ee		εε		aa	ɔɔ		oo		u[y]	ɔ
		↓		↓		↓		↓	↓		↓		↓	↓
	フランス語形成期	i		ei		iε		ae?	uɔ		ou		u[y]	ɔ
#32		↓		↓		↓		↓	↓		↓		↓	↓
	古フランス語 (12c.)			oi		ie		e	ue		eu		u[y]	ɔ

英語の大母音推移(中期英語の終りから初期近代英語にかけて)とその後の変化(15・16c.~19c.)

[i:]	[e:]	[ɛ:]	[a:]	[ɔ:]	[o:]	[u:]
↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓
[ai]	[i:]	[e:]	[ei]	[ou]	[u:]	[au]

V 語源欄に見る複合動詞の変遷

1 辞書による記述の仕方の違い

冒頭に挙げた3つの辞書の記述の違いをみておく。

1) 第3変化 *capere* から *accept*

『リ』 OF or L *ac-* (*cept- capio=capio to take*)¹⁰

この辞書の語源の記述は簡潔である。基礎動詞を挙げるのに不定詞ではなく現1単 *capio* で意味は「取る」。接頭辞が付くと母音の弱化を起こして *-cipio* (#23)。その目的分詞幹(完了受動分詞幹も反復動詞幹も同じ)は閉音節なので母音の弱化は *i* に至らずに *e* の段階にとどまり *cept-* (#24)。接頭辞が子音の同化を起こした形の *ac-* で挙げられるが、本来の形は示されない (#21)。そのラテン語または古フランス語から英語に入る。

『ジ』 初 14c; ラテン語 *acceptāre* より。「*ac-*(…に) + *-cept* (取る) = (同意し自分)に受け入れる」。cf. *concept, deceit, except, perception, reception*

この項だけからでは明らかではないが、ラテン語やフランス語段階での変化の詳細を略し、*acceptāre* という反復動詞の不定形をあげ、英語に入った世紀を記す。接頭辞と基礎動詞の説明には英語の綴りで対応するにとどまる。

『新』 (c1380) □ (O)F *accepter* // L *acceptāre* (freq.) ← *accipere to take* ← *ac* 'ad-' + *capere to take*

基礎動詞を不定詞で挙げ、別見出しの *ad* という接頭辞が子音同化で *ac* となることを示す。生じた複合動詞の不定形は *accipere* で、その反復動詞 (freq. と略記) の *acceptāre* または古フランス語 *accepter* から英語に入る。不定詞の語尾(と現在幹母音) *-(ā)re* と *-er* を除くと同形

である。

2 音の変化と借用

以下『研究社新英和大辞典』の語源欄により、これに説明を加えながら、本論で扱った動詞を含む複合動詞の成立を幾つかたどってみる。

2) 第2変化 *tenēre* から *contain*

contain (c1300) *containe(n)* □ (O)F *contenir* < L *continēre*
← con- 'com-' + *tenēre to hold*

第2変化は不定詞が *-ēre* で終わる。別見出しの *com* という接頭辞は子音の部分同化で *con* となり、母音は *e* から *i* へ弱化して、複合動詞の不定詞は *continēre*。*tenēre* はフランス語で語尾が *-ir* の第4変化に移動して *tenir*。中期英語の不定詞の語尾は *-e(n)* で、これは後に消失。(中期英語本来の母音は *ē* であったが、*ordeinen (ordain)*, *peinten (paint)* などとの類推で *ei* になり、近代英語では *ai* と綴られるようになった『研究社英語語源辞典』)

3) 第4変化 *venīre* から *invent*

invent (c1475) *invente(n)* ← L *inventus* (p.p.) ← *invenīre to come upon, discover, contrive* ← *in + venīre to come*]

第4変化は不定詞が *-īre* で終わる。その完了受動分詞から—ここでは男性単数主格の語尾 *-us* で表示している—中期英語に動詞として入り、不定詞語尾は後に消失。

4) 以下第3変化、*dūcere* から *educate*

educate (1447) ← L *ēducātus* (p.p.) ← *ēducāre* (cf. *ēdūcere* 'to educe') *to bring up a child physically or mentally* ← *ē-* 'ex' + *-duc-* (← IE **deuk-* *to lead*)

印欧祖語の再建形 **deuk-* のゼロ階梯は **duk-*、ラテン語の綴りとしては *-duc-*。接頭辞 *ex* は基礎動詞の語頭の子音の種類により *ē* に。別見出しの *educate* は *ēdūcere* の現在語幹からであるが、*ēducāre* は語根のゼロ階梯から作られた第1変化動詞で、*educate* はその完了受動分詞から作られた。

5) *cēdere* から *succeed*

succeed (1375) *succede(n)* □ (O)F *succéder* // L *succēdere to up, follow, prosper* ← *sub + cēdere to go*

接頭辞 *sub* は子音の同化で *suc-* に。基礎動詞 *cēdere* は第3変化であるが、フランス語で第1変化に移動。不定詞の語尾とアクセント記号をはずせば中期英語も同形。その後の大母音推移で基礎動詞部分の母音は [e:] から [i:] か。

6) *dīcere* から *predict*

predict (1546) ← L *praedictus* (p.p.) ← *praedīcere to say before* ← *prae-* 'pre-' + *dīcere to say*

完了受動分詞から英語に入るが、語末の母音は消滅か。

7) *caedere* から *concise*

concise (1590) □ L *concīsus* (p.p.) ← *concīdere to cut to pieces* ← *con-* 'com-' + *caedere to cut*

別見出しの *com* という接頭辞は子音の部分同化で *con* となり、基礎動詞の母音は *ae* から *ī* に弱化。*caedere* は歯音を含むために目的分詞は *t* に代わって *s* の *caesum* で、複合動詞では目的分詞も母音の弱化。完了受動分詞から英語に入るが、語末の母音はつづり字には残る。その後の大母音推移で基礎動詞部分の母音は [i:] から [a] か。

8) *claudere* から *conclude*

conclude (a1325) *conclūde(n)* □ L *conclūdere to shut up, end* ← *con-* 'com-' + *claudere to shut*

con については上に同じ。基礎動詞の母音は *au* から *ū* に弱化。現在幹がそのまま英語につづり字の上で残る。

終わりに

Watkins は印欧祖語に遡る英語の語彙のルーツをたどるその辞書のなかで、*capere* という単独の動詞に由来する英語の語彙を 18 挙げている。

*cable, cacciatore, caitiff, capable, capacious, capias, capstan, caption, captious, captivate, captive, captor, capture, catch, cater, chase, cop, copper*¹¹

capere の不定詞の語尾 *-re* を取り、さら現在語幹を形成している母音 *-e-* を除くと、*cap-* が残るが、これが英語の語彙にそのままの形で残っているのは、ここに挙げた中の半数ほどである。言い換えれば半数は比較的容易に語源を推測できるが、残る半数は、母音が異なっていたり、接尾辞が加わる時に子音に変化が起こっていたり、難しいということになる。

さらに *capere* に由来する英語の複合語としては 21 語を Watkins は挙げている。

*accept, anticipate, catchpole, conceive, deceive, except, inception, incipient, intercept, intussusception, municipal, nuncupative, occupy, participate, perceive, precept, receive, recipe, recover, recuperate, susceptible*¹²

いっぽう *capere* を基礎動詞するラテン語の複合動詞と

して Michel de Vaan が挙げているものに 2 語を加えたものが次の語彙である。名詞を複合語の第 1 要素とする動詞などは省き、動詞以外の品詞も省いた。この 14 語はすべて上に挙げた英語の語彙に入っている。

accipere, anticipare, concipere, decipere, excipere, incipere, interciperere, occipere, occupare, percipere, praecipere, recipere, recuperare (reciperare), suscipere¹³

英語の語彙で語末または語末近くに t を含むものが、ラテン語動詞の目的分詞幹に由来する動詞 (accept, anticipate など)、名詞 (inception など)、形容詞 (susceptible) であり、それ以外はおよそ現在幹に由来すると考えられる。ただし incipient は t を含むが、これは目的分詞幹のものではなく、現在幹から作られる現在分詞の一部で、英語の接尾辞 -ent, -ant はこれである。古フランス語や中世ラテン語から中期英語に入ったものを中心に、ルネサンス時代に作りだされたものなども含む英語のこうした動詞が、発音はともかく綴りの上ではラテン語複合動詞の方言ではないかと思われるほどよく似ていることに驚かされる。

capere(cap-) 単体から英語に入ったものは、核となるのが多くの場合 1 音節なので見分けにくいのに対し、複合動詞の場合には、20 ばかりの常用される接頭辞に基本的な意味の動詞を結びつけ、これに音の変化の規則をあてはめるなら、形態上の類推はまだ比較的容易であろう。そうして、これらにさらに接尾辞を付けた名詞、形容詞、副詞などの派生語を理解していくのも語彙の学習・習得の一つの方法ではあった。綴りに比べると音は変化しやすい。accept と receive という綴りの根っこが同じだと知れても、「アクセプト」と「リシーヴ」と聞かされて遠い昔に共通していたはずの音を探り当てるのは不可能に近い。

参考文献

寺澤芳雄『英語語源辞典』研究社 1997, 1999.

小島義郎ほか『英語語義語源辞典』三省堂 2004.

中山恒夫『古典ラテン文法』白水社 2007.

大西英文『初めてのラテン語』講談社文庫 1997.

C.Watkins: *The American heritage dictionary of Indo-European roots*. 2nd ed. Boston / New York 2000.

L.R.Palmer, *The Latin Language*. 1954.

Michiel de Vaan, *Etymological dictionary of Latin and the other Italic languages*. Leiden 2008.

O.J.L.Szemerényi, *Introduction to Indo-European Linguistics*. Oxford 1996.

注

1 英和辞典の記述で、ラテン語・フランス語がイタリック体、英語が立体になっているものは、本稿の記載に合わせるためこれを逆にした。

2 ae の発音は [ai]。ei の発音は古典期には [i:] に変わっていた。

3 中山恒夫『古典ラテン語文典』白水社 2007, p.188.

4 動詞の場合「変化」ではなく「活用」の語が用いられることもある。

5 『ジ』初 14c; ラテン語 *acceptāre*。『新』(c1380)**(O)F *accepter* // *L acceptāre* (freq.)。

『ラ』c1380. 中期英語 *accepten* < 中期フランス語 [1317] *accepter* < ラテン語 *acceptāre*。

6 大西英文『初めてのラテン語』講談社文庫 1997. p.145.

7 Wheelock's Latin. 6th Edition. p.436ff.

8 この項目は主に研究社『英語語源辞典』と白水社『仏和大辞典』などの解説によった。

9 古典期のアクセントは語末から 2 番目の音節が長い場合 (長母音か二重母音を含むか、閉音節) はそこに、短い場合はそのひとつ前の音節に。

10 英和辞典の記述で、ラテン語・フランス語がイタリック体、英語が立体になっているものはこれを逆にした。

11 C.Watkins, *ibid.* p.37

12 C.Watkins, *ibid.* p.37 に *precept* を追加。

13 Michel de Vaan, *ibid.* p.89 に *excipere, suscipere* を追加。

基本的な動作を表わす動詞と常用される接頭辞からなる複合動詞の表

0	1	2	3	4	5	6	7	8	9
ラテン語動詞の主要な意味(漢字)	追	落	切	捕	行	言	置・与	導	取・買
ラテン語動詞の主要な意味(英語)	to do, act, drive, conduct, lead, weigh	to fall, die	to cut, strike	to take, seize, catch	to go, withdraw, yield	to say, tell	to set, to give	to lead	to obtain, buy
ラテン語動詞に遡る外来語	アクション	アクシデント		キャプチャー	プロセス	ディクテーション		コンダクター	
直接法能動態現在1人称単数形活用型	agō	cadō	caedō	capīō	cedō	dicō	*.dō	ducō	emō
不定詞	agere	cadere	caedere	capere	cedere	dicere	*.dere	ducere	emere
直説法能動態完了1人称単数形目的分詞(supinum)	ēgī	cecidi	caesum	cēpī	cessi	dictum	*.deditum	ductum	ēmitum
印欧祖語の語根再建形	ag-	kad-	kaē-id-	kap-	ked-	deik-	dhē-dō-	deuk-	em-
語根における意味	to drive, draw, move	to fall	to strike	to grasp	to go, yield	to show, pronounce solemnly	to put, set; to give	to lead	to take, distribute
ab	追いやる		切り落とす		立ち去る	否定する	取り去る	連れ去る	
	abigere		abscidere <i>abscide</i>		abscēdere	abdicere	abdere	abdūcere	
	abāctum		abscisum		abscessum <i>abcess</i>	abdictum	abditum	abductum <i>abduct</i>	
ad	追いやる	落下する	切りつける	受け取る	近寄る	吉と出る	添える	引き寄せる	取り去る
	adigere	accidere <i>accident</i>	accidere	accipere	accēdere <i>accede</i>	addicere	addere <i>add</i>	addūcere <i>adduce</i>	adimere
	adāctum		accisum	acceptum <i>accept</i>	accessum <i>access</i>	addictum <i>addict</i>	additum <i>addition</i>	adductum <i>ademption</i>	
cum	駆けたてる	倒れる	切り倒す	取り入れる	去る	申し合わせる	組み立てる	集める	組み合わせる
	cōgere	concidere	concidere	concupere <i>conceive</i>	concedere <i>concede</i>		condere	conducere <i>conduce</i>	cōmere
	coāctum		concisum <i>concise</i>	conceptum <i>concept</i>	concessum		conditum	conductum <i>conduct</i>	comptum
dē	(時を)過ごす	落下する	切り取る	欺く	立ち去る		引き渡す	引き下ろす	取り去る
	dēgere	dēcidere <i>decay</i>	dēcidere <i>decide</i>	dēcipere <i>deceive</i>	dēcedere <i>dēcessum</i> <i>decease</i>		dēditum	dēducere <i>deduce</i>	dēmere
			dēcisum	dēceptum <i>dēcept</i>			dēditum	dēductum <i>deduct</i>	
ex	追い出す	(すべり)落ちる	切り出す	引き上げる	出ていく	陳述する	発する	引き出す	取り出す
	exigere	excidere <i>escheat</i>	excidere	excipere	excedere	ēdicere	ēdere	ēducere <i>educ</i>	eximere
	exāctum <i>exact</i>		excisum <i>excise</i>	exceptum <i>except</i>	excessum	ēdictum <i>edict</i>	ēditum <i>edit</i>	ēductum	exemptum <i>exempt, (example)</i>
in	駆けたてる	(..中へ)落ちる	切り込みを入れる	始める	赤く	宣言する	入れる	導き入れる	
	inigere	incidere <i>incident</i>	incidere	incipere	incēdere	indicere	indere	inducere <i>induce, endue</i>	
	ināctum	incisum <i>incise</i>	inceptum <i>inception</i>	incessum <i>incessant</i>	indictum <i>indict</i>		inductum		
ob		落ちる	打ち倒す	始める	向かっていく		間にはさむ	(..の方へ)導く	
		occidere <i>occident</i>	occidere	occipere <i>occupare</i>	ocēdere		obdere	obducere	
		occisum <i>occasion</i>		occupum <i>occupy</i>			obductum		
per	突き刺す		ぶんなぐる	つかむ			破壊する	連れて行く	行かせる
	peragere		percidere	percipere <i>perceive</i>			perdere	perducere	perimere
	perāctum			perceptum			perditum <i>perdition</i>	perductum <i>peremptum</i> <i>peremptory</i>	
prae			切り離す	先取る	先に行く	前もって言う		(防壁などを)前方に築く	
			praecidere	praecipere	praecēdere <i>precede</i>	praedicere		praeducere	
			praecisum <i>precise</i>	praeceptum <i>precept</i>	praecessum	praedictum <i>predict</i>			
prō	前へ駆る	前へ落ちる			前に進む	予言する	押し出す	連れて行く	取り出す
	prōdigere	prōcidere			prōcēdere <i>proceed</i>	prōdicere	prōdere	prōducere <i>produce</i>	prōmere
	(prōdāctum)				prōcessum	prōdictum	prōditum	prōductum <i>promptum</i> <i>prompt</i>	
re	(家畜などを)追い立てて戻す	落ちる	(木などを)根元まで切る	入ることを許す	退く		もとに戻す	連れ戻す	買い戻す
	redigere	recidere <i>recidivist</i>	recidere	recipere <i>receive, recipe</i>	recēdere <i>recede</i>		reddere <i>(render)</i>	reducere <i>reduce</i>	redimere
	redāctum <i>redact</i>		recisum <i>recision</i>	receptum	recessum	redditum	reductum <i>reduction</i>	redemptum <i>redeem</i>	
sub	上へ駆けたてる	(人か)くずおれる	(下の方を)切る	(下で)受け取る	下に行く		(下に)置く	(下から)引き上げる	(手に)取る
	subigere	succidere	succidere	suscipere	succēdere <i>succeed</i>		subdere <i>(surrender)</i>	subducere <i>subdue</i>	sūmere
	subāctum			susceptum <i>susceptible</i>	successum <i>success</i>		subductum <i>subduct</i>	sumptum <i>sumptuary</i>	

1人称単数のアルファベット順
 第2段のラテン語動詞の主要な意味(英語)と第10段の語根における意味は C.Watkins, The American Heritage Dictionary of Indo-European Roots. 2nd. Edition. 2000. により、第9段の再建形は同書の簡略表記された見出し語による。
 ラテン語の複合動詞は Michiel de Vaan, Etymological Dictionary of Latin and the other Italic Languages, 2008. により、英語の複合動詞は Watkins による。
 ラテン語複合動詞の訳は『研究社羅和辞典』改訂版 2009 による。

(各複合動詞の欄で、点線の上は不定詞、下は目的分詞。それぞれの形に由来する英語の動詞をその下にイタリックで示す。動詞がない場合は他の品詞も。)

10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
行	作	運	送	置	立	立	張	保	来	向
to go	to do, make	to carry	to let go, send off, throw	to put, place,	to set, place, stop, stand	to stand	to stretch, extend	to hold, keep, maintain	to come	to turn
	パーフェクト	フェリィ	ミッション	コンポーネント	スタンド	スタンド	テント	コンテナ	コンビニ	コンバート
eō 不規則	faciō 3b	ferō 不規則	mittō 3	pōnō 3	sistō 3	stō 1	tendō 3	teneō 2	veniō 4	vertō 3
īre	facere	ferre	mittere	pōnere	sistere	stāre	tendere	tenēre	venire	vertere
īi	fēcī	tulī	mīsī	posuī	stīuī, stēfī	stefī	tetendī	tenuī	vēnī	vertī
itum	factum	lātum	missum	positum	statum	statum	tentum/tensum	tentum	ventum	versum
ei-	dhē-	bher-	[mittere]	apo-*	stā- (III)	stā- (I)	ten-	ten-	g*ā-	wer-
to go	to set, put	to carry	to let go, send off, throw	off, away *	to stand	to stand	to stretch	to stretch	to go, come	to turn, bend
去る		持ち去る	派遣する		退く	離れて立つ		近づけない		そらす
abīre		auferre (*auとなるのは aufērōとaufugiōだけ) afferent	āmittere		absistere	abstāre		abstinēre abstain		āvertere avert
abitum		ablātum	āmissum					abstentum		āversum
近づく	働きかける	運んでくる	行かせる	(そばへ)置く	そばに立つ	そばに立っている	差し伸べる	留めておく	…へ来る	向ける
adīre	afficere	afferre	admittere admit	appōnere	assistere assist	a(d)stāre	attendere attend	attinēre	advenīre avenue	advertere
aditum adit	affectum affect	allātum	admissum	appositum apposite	なし		attentum	attentum	adventum advent, adventure	adversum adverse
いっしょに行く	遂行する	運び集める	つなぐ	いっしょに置く	位置を占める	いっしょに立っている		いっしょにしておく	同意する	回転させる
coīre	cōficere	cōferre confer	committere commit	compōnere component	cōsistere consist	cōnstāre constant	contendere contend	continēre contain, continue	convenīre convene, convenient	convertere convert
coitum coitus	cōnfectum confect	collātum	commissum	compositum compose		(cōnstātūrus)	contentum	contentum content	conventum convention	conversum converse
	背く	運ぶ	下方へ送る	下に置く	離れている		ゆるめる	妨げる	やってくる	転ずる
	dēficere deficient	dēferre defer	dēmittere demit	dēpōnere depone	dēsistere desist		dētendere	dētīnēre detain	dēvenīre	dēvertere
	dēfectum defeat, defect	dēlātum	dēmissum	dēpositum deposit			dētensum	dētentum	dēventum	dēversum
出る	産出する	持ち出す	送り出す	外へ置く	出てくる	突き出る	伸ばす		出る	倒す
exīre	efficere efficient	efferre efferen	ēmittere emit	expōnere exponent	exsistere exist	exstāre extant	extendere extentum, extensum		ēvenīre	ēvertere evert
exitum exit, issue	effectum effect	ēlātum	ēmissum	expositum expose					ēventum event	ēversum
入る	染める	運び込む	入ることを許す	(ある物の中に)置く	(..に)立つ	(..の中に)立っている	(びんと)張る		(偶然)出会う	裏返す
inīre	infcere	inferre infer	immittere	impōnere	īnsistere insist	īnstāre instant	intendere intend		invenīre	invertere invert
initum		illātum	immissum	impositum impose		(īnstātūrus)	intentum		inventum invent	inversum
顔を合わせる	妨げる	前に置く	行かせる	前に置く	立ちはだかる	立ちはだかる	差し出す	(ある行動状態を保つ)	向かって行く	(ある方向へ)向ける
obīre		offerre offer	omittere (*only in omitto, more usually abm- or om-) omit	oppōnere	obsistere	obstāre obstacle	ostendere ostentum, ostensum ostensible	obtinēre	obvenīre	obverto obvert
obitum obituary		oblātum	omissum	oppositum oppose		(obstātūrus)		obtentum	obventum	obversum
見えなくなる	完成する	持っていく	行かせる		あくまでも続ける	立つままでいる	やり遂げる	広がる	着く	ひっくり返す
perīre perish	perficere	perferre	permittere permit		persistere persist	perstāre	pertendere	pertinēre pertain	pervenīre prevenient	pervertere pervert
peritum	perfectum perfect	perlātum	permissum permise			(perstātūrus)	pertensum, pertentum		perventum prevent	perversum
先行する	長に任ずる	前へ持ってくる	先に送る	前に置く		前に立つ	前に伸ばす		先に着く	まっ先に(の方へ)向ける
praēīre	praeficere	praeferre prefer	praemittere	praepōnere		praestāre	praetendere pretend		praevenīre	praevertere
praetor	praefectum prefect		praemissum	praepositum preposition		(praestātūrus)	praetentum		praeventum	praeversum
進み出る	前進する	前へ運ぶ	(後、影などを)伸びるにまかせる	前に置く	突出する	商売をする	伸ばす		現れる	
prōdīre	prōficere proficient	prōferre proffer	prōmittere	prōpōnere	prōsistere	prōstāre	prōtendere		prōvenīre provenance	
	prōfectum profit		prōmissum promise	prōpositum propose		prōstītum	prōtentum		prōventum	
帰る	再建する	持ち帰る	送り返す	もとの所に置く	立ち止まる	同じ所にとどまる	(弓の弦を)ゆるめる	しっかりつかまえる	帰る	引き返すdep.
redīre	reficere	referre refer	remittere remit	repōnere	resistere resist	restāre restive	retendere	retinēre retain	revenīre revenant	revertī
	refectum refect	relātum	remissum	repositum			retentum	retentum	reventum	reversus sum
下へ行く	つける	与える	下に置く	下に置く	しっかり立つ	(ある状態に)ある	下でびんと張る	支える	助けに来る	ひっくり返す
subīre	sufficere suffice, sufficient	sufferre suffer	summittere (submittere) submit	suppōnere	subsistere subsist	substāre substance	subtendere subtend	sustinēre sustain	subvenīre souvenir	subvertere subvert
subitum subito	suffectum	sublātum	summissum	suppositum suppose	sustentum		subtentum, subtensum	sustentum	subventum subvention	subversum